

面積はおよそ 3,030 万平方キロメートル。人口約 8 億 5,000 万人。

アフリカは人類発祥の地と言われ、古代文明が人類史に大きな影響も与えた。輝かしい起源説が世界史を折檻している反面、「暗黒の大陸」「未開の大陸」とかの別称が通説となっている。厳しい自然環境と点在する砂漠。飢えと病気に苦しむ多種多民族と地平線に広がる大地。そして、そこで繰り広げられる野生の動物たちの過酷な生存競争。

これが自分の知り得る地理的な一般知識とアフリカ観であった。今まで積極的な関わりを求めることはなかった自分にとって、アフリカは厚いベールに包まれたままになっていた。

今年の夏、自分が経験したアフリカは、今まで自分が抱いていたイメージを覆すのに十分なものであった。

ケニアのある村でのホームステイ。

村には毎日が笑いに溢れ、いままでに実感したことがない新鮮な日々を体感した。村に  
いるほとんどの人々が、子どもから大人まで互いの名前を覚え、人とすれ違うたびに必ずあ  
いさつを交わす。突然の訪問者である自分たちを快く歓迎し、チャイ（茶）を出し、昔から  
の親しい友人のようにいろいろな話を聞かせてくれる。

村全体が 1 つのコミュニティ。訪問者も含め村の人々全員が仲間。そんな感覚を持った。  
最近の日本では目にすることがなくなっている、本当のコミュニティのあるべき姿を見  
せられた気がした。お隣さんの名前や素性すらはっきり分からない人間社会にある日本では  
疎遠のものとなってしまう親近感という人と人との温もりも感じた。

「ハバリヤコ？」（元気ですか？）

「ムズリ。」（元気です。）

当然のように交わされるやりとり。自分もぎこちないけれど、村人とこの言葉を繰り返し  
交わしていると、忘れかけていた人と人との自然な繋がりを感じ、心が温かくなってい  
く妙な心地よさを味わった。

電気も水道もない自分たちの生活とはかけ離れた生活。贅沢という概念は持ち合わせ  
ていないかもしれない。食事はおいしくないし、風呂もない。臭いトイレに、ネズミの  
出る寒い寝室。家を離れるお出かけの前には雨水を頭からかぶるだけ。

決して豊かとは言えない自給自足の生活だけれど、村人には貧困に喘ぎ苦しむという  
姿や感情は見られなかった。村人の純真な心やありのままの日常をありのままに受け入れ  
る自然体の穏やかさがそこにはあった。皆が助け合い、足りないものを補いながら生き  
ている。自分たち日本人から見れば皆が貧しいにもかかわらず、その中でも比較的豊か  
な人は、食べ物や着るものがない人にお金や物品を寄付する。遠い国から来た、顔の色  
も言葉も考えも違う自分たちに、普段はできないような精一杯のもてなしを惜しみなく  
してくれる。

Friendly and kindly。全ての村人がそうだった。

喜怒哀楽が激しくて、感情を思いきり出しながらも、周りを気遣い、自分たちの思う  
ように精一杯生きている。皆ユーモアがあって、歌とダンスと笑顔のあふれる村。自分  
はこの地で短期間ではあるが寝食を共にする中で、人と人の繋がりや絆の大切さに改め  
て気付かされ、大袈裟ではあるが現代日本の問題点を指摘されたように感じた。

そしてマトマイニ（孤児院）での5日間。

泥棒、虐待、強姦、売春、HIV。

スラム訪問と菊本さんの話から、スラムをはじめとするケニアにおける現状が痛いほど伝わってきた。ありとあらゆる社会問題が身近に起こり、その日の食べ物を手に入れる手立てを懸命に探す人々。ゴミまみれのひどい異臭が漂う環境の中で、身を削りながら格闘する日々。

自分が訪れたキベラスラムでの現実には、胸が締めつけられしばらく言葉を発することができなかった。不見識で薄情かもしれないが、正直なところ今の自分はとてもここでは暮らせない。いや、生きていけないといった方がより適切かもしれない。

しかし、現実にはここには多くの人々が生きていた。自分たちの力で、わずかな食料や命の水を分け合いながら生きていた。生きるのさえ難しいと思われるこの地においても、人々は夢や希望を語り、そして笑顔すら見せてくれた。自分たちにはない人間としての逞しさに衝撃を受けるほどであった。

想像しがたいような辛い経験をしてきた孤児院の子どもたちやスラムの子どもたちは極貧の中でも心豊かだった。周りを気遣う気持ちを持っていた。そして、「あなたとわたしが生きていられるように、明日を迎えられるように」とキラキラと輝く透き通った目で自分に訴えかけてくれた。常に生と死に直面しているという日々を送っているこの子たちは、自分たちよりも遙かに尊い日々を生き抜いているのではないか。

自分は今回のアフリカ体験訪問で言葉では言い尽くせないほど多くのそして深い衝撃を受けた。多くのそして深い衝撃の余韻はしばらく自分の体中に残ったままであった。

自分はもう一度アフリカに帰りたい。

悲惨極まりない状況の下でも、

笑顔を忘れず明日に向かって歩み出そうとしている

人々の

子どもたちの

キラキラ輝く未来を見るために。